

はじめに

本日は、少し長いですが、サムエル記下 22 章 1 節～23 章 7 節を学びます。小見出しに従うと「ダビデの感謝の歌」と「ダビデの最後の言葉」です。学びの進み次第によっては、途中になるかもしれませんが、ともかく、この部分を学んでいきましょう。

前回も触れましたが、この部分は、21 章 1 節～23 章 25 節の中心部になっています。箇条書きにすると、以下のようになります。

- ①21 章 1～14 節ダビデ治世下の大飢饉
- ②21 章 15～22 節ペリシテ人との戦い
- ※22 章 1 節～23 章 7 節ダビデの感謝の歌と最後の言葉。
- ③22 章 8～38 節ダビデの勇士たちの紹介
- ④23 章 1～25 節ダビデの人口調査という罪

ご覧のように、※の 22 章 1 節～23 章 7 節のダビデの感謝の歌と最後の言葉を中心にして、ダビデ王の治世下での四つの出来事が語られているわけです。ダビデ治世下の大飢饉、ペリシテ人との戦い、ダビデの勇士たちの紹介、そしてダビデの人口調査という罪についての記事です。これらは、時系列的に起こった出来事というよりも、ダビデの「感謝の歌」と「最後の言葉」との密接な関連で理解すべきものと思われまます。

### I サムエル記下 22 章 1 節～23 章 7 節の話の流れ。

まずサムエル記下 22 章 1～51 節の「ダビデの感謝の歌」を見てみましょう。これは、詩編 18 編にもそのまま掲載されています。ということは、ダビデ個人の「感謝の歌」はイスラエルの民の共有の歌になっている、ということです。したがってまたイスラエルの民は、この歌によってダビデの信仰を受け継ぐ者にもなっている、ということです。

1 節では、ダビデが「感謝の歌」を作った経緯が説明されています。

2～51 節が「感謝の歌」の本文です。ここには、いくつかの場面の転換があります。それを意識して読んでみると、次のようになります。

3 節 神を呼び求める。

4～7 節 陰府、ダビデの置かれている状況

8～16 節 神の来臨

神は御自分が創造した被造物を壊す仕方で来臨しない。むしろそれらを用いて来臨する。ここでは出エジプトの救いが再現されている。

17～20 節 神の救い

わたしたちは、イエス・キリストにおいて神御自身が陰府にまでくださったことを知っている。讚美歌 227 番参照

21～28 節 神の救いにふさわしくあるようにという教え

ダビデの正しさは、神の救いを求める点にある。

29～46 節 神の救いによって強められた者

ここでの戦いは、すべて罪と戦ってくださる神の戦いであることに注意せよ。

47～51 節 神への讃歌。

次に、「ダビデの最後の言葉」を見てみましょう。「最後の言葉」というのですから遺言です。

1 節は、ダビデが最後の言葉を語る経緯についての説明です。ここでダビデは「高く上げられた者」と呼ばれています。これは、ダビデの伝記的な記事を踏まえてのことでしょう。

2～7 節が本文です。

2～3 節 ダビデがイスラエルの王であるが、それは世俗の国家の王と違って、神の言葉を語る預言者であることに注目したい。

3 節後半～4 節

そのようなダビデ的な存在こそが、イスラエルの王にふさわしい。

こうして 5 節では、ダビデ的な王が存続し、いわゆるダビデ王朝が成立する。

6～7 節は、世俗の権力者にならないように、と言う警告です。

## II サムエル記下 22 章 1 節～23 章 7 節の解説

### 【1 節】

わたしたちは、これまでダビデがペリシテ軍と戦ったこと、またサウルの軍に追撃されたことを学んできましたが、ダビデの気持ちがどうであったのかは語られていませんでした。しかしこの「感謝の歌」において、わたしたちはそのことを垣間見るわけです。

ところでここではダビデが「主に歌をささげた」といっていることに注目したいのです。当時、神への感謝といえば犠牲礼拝が普通でした。しかしダビデは、主への感謝の歌こそが、神への捧げものであるといっています。これは、精神主義ではなく、心と体の全体での神へのささげものといえることができます。言い換えると、古い犠牲礼拝を乗り越える新しい要素がある、ということです。

### 【3 節】

ダビデは、ここで神を様々な言い方で呼びかけています。これも、文学的な技法ではなく、神に救っていただいた、という数々の体験があつてのことなのです。

### 【4～7 節】

ここは、ダビデの置かれている危機的な状況が歌われています。ペリシテが攻めて来て恐ろしかったとか、サウルの追撃が恐怖であったというのはもちろんのことでしょう。しかし真の危機は、ダビデとその一行が「陰府」の世界に転落した、ということです。つまり神に見捨てられた世界へ転落したということです。

しかしダビデは、まさにそこから神に助けを叫び求めました。ダビデの声は、「**神殿に響き 叫びは御耳に届く。**」というのです。これは、もちろんエルサレム神殿が建立された後に事が反映しています。ダビデ自身は神前建立以前にいますから、神の耳に届いたということです。

### 【8～16 節】

そうすると、神はダビデとその一行を助けるために、行動を起こし、来臨します。この時、神は被造物の世界の秩序を無視したり、壊したりせずに、来臨します。だから地震、火山の噴火、密雲、稲光、雷鳴といった自然現象を用いて、神が来臨することが分かります。

この時、主なる神は怒っています。それは、ダビデとその一行を苦しめる罪の力に対して、あるいは「陰府」の力に対して怒っておられるのです。かくして「主の叱咤に海の底は姿を現し 主の怒りの息に世界はその基を示す」のです。ダビデたちが捉えられていた陰府の世界が、主なる神によって暴かれたのです。

#### 【17～20 節】

こうしてここで神の救いが歌われます。「主は高い天から御手を伸ばしてわたしをとらえ 大水の中から引き上げてくださる」というのです。

わたしたちは、この神の救いの「御手」が、空想的なものではなく、極めて明確にイエス・キリストに他ならないことを知っています。ルターがアドヴェントのために作詞した讃美歌 229 番では、まさにそのことが歌われています。

2 きよき御国を、離れて降り  
人の姿で 御子は現われん。

3 みむねによりて おとめにやどり、  
神の独り子 人となりたもう

4 この世に生まれ、陰府にくんだり、  
御父にいたる 道を拓く主。

わたしたち人間はこの世に生き、やがて死んでいきます。しかし死にたくないの、誰もが、命に向かって逃走を開始します。より強く、より豊かになれば、死を免れるように錯覚するのです。しかし真実なのは、イエス・キリストが、まさにそのような人間の運命に十字架の死において連帯し、復活の命に向かって、わたしたちを陰府から引き上げてくださっている、という恵みです。人間の生と死の根本には、主イエスの十字架がすでに立っているのです。このキリストの恵こそが、福音として語られるものなのです。

ところでこの時、忘れてならないことがあります。それは「敵は力があり わたしを憎む者は勝ち誇っている」ということです。わたしたちは無力であり、「敵」の方が遥かに強いのです。だからいわば負け戦続きとなるのです。

しかしそこで話は終わりではありません。わたしたちは無力です。しかしイエス・キリストは、わたしたちを陰府に落とす敵よりも遥かに力があり、わたしたちを救い出すことが出来るのです。したがってキリストの恵みの力こそが、わたしたちにとっての命の可能性なのです。

#### 【21～28 節】

では、何故、主なる神は、わたしたちを救ってくださるのか。それは、わたしが正しいからなのです。この正しさとは、いわゆる律法主義的な正しさのことではありません。救いの神に助けを求めることこそが「正しい」のであり、神のご栄光にふさわしいことなのです。

#### 【29 節】

このようにして「主よ、あなたはわたしのともし火」であり、「主はわたしの闇を照らしてくださる」のです。つまり「陰府」の暗さは、神の救いの「御手」によって、すでに破られましたか

ら、明るさが来ています。こうして神の救いによって強められた者とされ、わたしもまた神の救いの御業に仕えるのです。「あなたによって、わたしは敵軍を追い散らし」、「わたしの神によって 城壁を越える」のです

さらに「手に戦いの技を教え 腕に青銅の弓を引く力を帯びさせてくださる。」のです。つまり無力で小さなわたしもまた、神の救いによって強められ、神の救いの御業に参加し仕えるのです。

こうして「あなたは戦う力をわたしの身に帯びさせ 刃向かう者を屈服させ 敵の首筋を踏ませてくださる」のであり、神の救いの勝利に与る者としてくださるのです。実際、23 章 8～39 節に出て来る勇士たちとは、神の救いによって強められた者たちなのです。

#### 【47～51 節】

この部分は、「陰府」から救い出す神は、改めて「主は命の神」と呼ばれています。この主の御支配が全世界に満ちるために、ダビデの王国はあるのです。

#### 【23 章 1～7 節】

ここは、ダビデの遺言です。ダビデについて「高く上げられた者」とあります。自分で立身出世したのではなく、神がダビデを、羊飼いの少年だったのに、イスラエルの王となさったのです。ところでイスラエルの王とは、「主の霊はわたしのうちに語り 主の言葉はわたしの舌の上にある」とあるように、何と、預言者の働きをする者のことなのです。世俗の国家の王は、軍力と経済力を誇ります。実際、現代の国の中には、軍事パレードをする国もあります。

しかしイスラエルの王は、神の言葉を語るのです。そこに正しい統治があるからです。こうしてダビデ王の王国は神との永遠の契約にささえられて存続します